

私を育てた
あの時代、あの出会い

Vol. 1

求め続け、学び続けるからこそ 得られる出会いがある

東京都世田谷区立給田小学校校長 土橋稔 DOBASHI MINORU

教師は日々、さまざまな働きかけの中で子どもを育てる。そして教師は、共に働く仲間との出会いの中で育っていく。出会いから学んだ教育の原点、そして次代を担う若い世代に伝えたい不易を、土橋校長が語る。

体育倉庫前で 考え込む先輩教師

新採で渋谷区立猿楽小学校に着任した当初は、授業が辛くて仕方ありませんでした。「どうすれば45分間を持たせられるのか……」と暗澹とした気持ちで、教室に向かう階段を上ったことを今でも覚えています。ところが2週間ほど経つと、そんな憂うつは吹き飛びました。次第に子どもとの人間関係が出来て教師の楽しさを実感しつつある中で、給料日がやって来たのです。初めての給料を手にして、「自分は仕事で学校

に来ていたのだ」と、甘い気持ちが瞬時に抜けたことを思い出します。3歳年上で、私にとってはまさに頼れる先輩だった米田孝一先生との出会いも、教師としての自覚を深めてくれました。体育主任だった米田先生は、子どものためにとことん考えることを信条とする方でした。ある日、米田先生が体育倉庫の前に座ってなにやら思案顔でした。尋ねると、「いつも体育倉庫が片付かないのは、用具の配置に問題があるからに違いない。どうすれば子どもが片付けやすい体育倉庫になるかを考えている」。きちんと片付けられない



どばし・みのる 1977年、新採として渋谷区立猿楽小学校に着任。目黒区立菅刈小学校、世田谷区立東玉川小学校などを経て、2004年、世田谷区立給田小学校に校長として着任。現在に至る。

1977(昭52)
渋谷区立猿楽小学校で
米田孝一先生と出会う



懇親会での1コマ。
若き日の土橋校長(右)と
米田先生

1983(昭58)
目黒区立菅刈小学校に
赴任。同校に
勤務していた頃、
野口芳宏先生、
有田和正先生、
正木孝昌先生と出会う

1991(平3)
杉並区立
杉並第六小学校に赴任

1998(平10)
世田谷区立
東玉川小学校に
教頭として赴任

2002(平14)
世田谷区立
松沢小学校に赴任

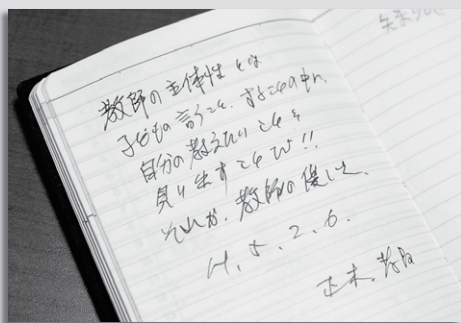
2004(平16)
世田谷区立
給田小学校に
校長として赴任

子どもや担任の指導が悪いとは思わず、教師として出来ることを精一杯考えていたのです。

同様に、授業も考え抜かれていました。サッカーが上達しないのはトランプが難しいからだと考え、扱いやすいようにボールの空気を少し抜いてみる。ソフトボールでは、攻撃側のチームからピッチャーを出して打ちやすいボールを投げさせ、守備側の全員の運動量を増やす。柔軟でユニークなアイデアにはいつも感心させられました。

教え込むのではなく、楽しみながら自発的に学ぶ環境をつくる。そのような米田先生の考え方は、私の授業観に大きな影響を及ぼしました。

当時を振り返って思うのは、私自



正木先生の直筆メッセージ。研究会に講師としてお招きしたとき、懇親会で「何か一言を」とお願いして書いていただいた

身がより良い授業を模索していたからこそ、米田先生の授業に共感できたのではないかといいことです。そうでなければ、きっと米田先生の「姿」が見えなかったでしょう。

一瞬で人生が変わるようなことは、そうはありません。自分から求め続け、教師として学び続ける姿勢があつてこそ、良い出会いを引き寄せ、自分を少しずつ変えられるのだと信じています。

出会いのチャンスは自分でつかんでほしい

30代の頃、研究授業や紹介により、野口芳宏先生（元千葉大学教育学部附属小学校）、有田和正先生（元筑波大学附属小学校）、正木孝昌先生（元筑波大学附属小学校）という3人の先生に出会えたのも、「もっとよい授業をしたい」という気持ちがあつたからだと思います。研究授業や書籍を通して学んだことの大きさは本当に計り知れません。先生方の授業に共通していたのは、子どもたちが自分から学びに向かいたいなる気持ちを引き出していたことです。教師が「1+1=2だぞ」と教え込むのではなく、子どもが「1+

子どもと共に学び続けることでプロの教師であり続けられる



1=2なんだ！」と驚きや発見とともに理解する、そんな授業でした。

「こういう授業なら、皆、楽しみながら学んでくれるはず」と、学んだことはすぐに実践しました。が、どれだけ素晴らしい指導法でも、子どもの実態とかけ離れていては、十分に効果は発揮されません。当時の私は、まだまだ一人ひとりの子どもの考えを十分にくみ取る力がなく、先生方のような授業は出来ませんでした。それに気付いたのもまた、学

びだったと思います。

3人の先生方には「名人の授業」として校内研究で授業をしていただきました。私が出来るのは、出会いのチャンスを与えることまで。本校の先生たちには貪欲な気持ちを持って、その出会いを自分のものにしてほしいと思います。

私自身、今後もより良い教育を求め続けます。子どもと共に学び続けることで、プロの教師であり続けることができると思っています。